



特集

障がい者・高齢者と築く 社会参加支援



編集にあたって

平賀瑠美 (筑波技術大学)

坊農真弓 (国立情報学研究所)

アシスティブテクノロジーやアクセシビリティコンピューティングは社会のニーズも多く、情報処理に携わる人々にとっては、聞き慣れた言葉になっている。このような研究や開発の成果は利用する当事者がいて価値が見出されるのだが、“作る人”と“使う人”の棲み分けは単純ではない。また、この分野では扱う範囲が非常に広く、成果物が生活全体や一生に影響を与えるほどの影響を持つ場合もある。このような分野の研究・開発は、学术界と実フィールドの融合、研究者と当事者の融合であることが求められる。

本特集は、幅広い研究対象をさまざまなバックグラウンドを持つ著者により紹介することで、情報処理に携わる人々と当事者がお互いを知り、共に社会支援を推進するための基盤を構築すること、また、より多くの人々がアシスティブそしてアクセシブルの

ための情報処理を考えるきっかけとなることを目指している。

本特集記事中、いくつかは当事者自身によって、またいくつかは研究者によって書かれている。当事者と研究者は別々の世界に生きているのだろうか。近年、当事者が自分のことを研究する当事者研究が盛んになりつつある。これは当事者が当該フィールドの特徴やニーズを知った上で、学术界でのトレーニングを積んで研究者になるという形である。言い換えれば当事者が研究に歩み寄るものである。これに対し、近年、最先端の研究成果は、実フィールドに何らかの形で貢献すべきであるという考え方が主流になりつつある。これは、研究者が学术界で得た成果を、当事者が生きる実フィールドに手渡すという形である。言い換えれば研究者が当事者や実フィールドに歩み寄るものである。本特集では、このような流れに乗り、当事者と研究者の歩み寄りの先に何が見えるのかを追求したいと考えている。

本特集の記事は研究対象による分類を試みてはい

るが、ご紹介できた当事者による研究ならびに情報処理分野からの支援システム研究は、関連研究のごく一部である。また、どこから読んでも独立した記事として面白いものとなっている。情報処理とは異なる分野で研究している当事者からは普遍的な問題提起を読み取ることができ、情報処理研究者からは、熱く楽しい思いや技術以外の課題についても知ることができらるだろう。

いくつかの記事中には新しい研究方法の試みが紹介されており、直接アシスティブテクノロジーやアクセシビリティ分野に携わらない研究者・技術者にとっても参考にしたり活用したりすることができよう。具体的なシステムの紹介をしている記事では、システムのない場合と実用化により信頼して使えるようになった場合を比べ、利用者にとってどのような世界が広がるかを想像してほしい。また、紹介されたシステムをヒントに、考えて楽しい、使って嬉しいシステムを妄想することができるかもしれないし、たった1人でもいい、その人の世界観を変えるようなモノや研究を生み出すことができるかもしれない。

「コグニティブ・アシスタント：スマート・マシンが変える障がい者・高齢者の社会参加」（浅川）は長年にわたり視覚障害者の情報獲得について研究を続けてきた著者がダイバーシティの意義も含め Information and Communication Technology (ICT) による明るい未来を説く。視覚障がい支援の研究として、「視覚障がい者の聴覚空間認知」（関）では聴覚から得る空間認知情報のメカニズムの概説と聴覚訓練のためのシステムの現状を、「視覚障がい者のタッチパネル利用補助に関する技術動向」（矢入）ではタッチパネルを例として製品化技術と製品化のための資金調達の在り方まで含めて広く技術受容について述べる。当事者による、「ろう者学教育コンテンツの開発—高等教育機関における聴覚障害学生向けの教育的支援を支える—」（大杉）では、ろう・難聴者が主体性、社会性を身に付けることの重要性とろう者学の意義が語られる。「ICT・音声認識の活用による講演・講義の字幕付与」（河原）は、字幕付与による情報保障の現状を技術的にはも

ちろん、人材確保、情報保障対象の内容まで多岐にわたり述べる。当事者による、「福祉機器開発と参加型デザイン—人と機器の適合を実現する—」（硯川）では、日常生活での福祉機器設計開発の難しさ、当事者参加型デザインの重要性が軽快に述べられている。多くの“世界初”を実現してきた著者との対談形式による「盲ろう者が見る世界—情報のインフラからコミュニケーションのインフラへ—」（福島・坊農）では人間の本质に触れる言葉を随所に読み取ることができる。当事者研究の推進者の1人として、社会として扱うべき問題を同時に研究している著者が、「発達障害当事者研究—当事者研究とソーシャル・マジョリティ研究の循環—」（綾屋）において、多角的な視点による研究の方法を論じる。自閉症スペクトル障害の支援、メカニズム解明については、「高機能自閉症スペクトラム障がいの感覚特性」（柏野）と「ソーシャル・イメージングの創成—自閉症・発達障がい児の社会性形成支援に向けて—」（鈴木）にそれぞれ記される。柏野は選択的聴取困難について、聴覚実験、障がい特性とその理解について述べる。他者との関係や情動を理解するための新しい技術として鈴木はソーシャル・イメージングを確立し、理解を深めようとしている。我々が将来当事者となる高齢者に関する研究として、従来研究を高齢者介護に活かすためにはどのような仕組が考えられるかが「高齢者の感性を尊重する情報処理技術—オノマトペに着目して—」（坂本）で記される。また、「ICT機器を装着した犬による生活支援—『認知症支援犬』の提案—」（大島・安田）では、身近なペットに高齢者の癒し以上の役割をしてもらうため、猫の手ならぬ犬の背中を借りた ICT 活用の方法を述べる。

これらの記事の著者や各地で関連研究を進めている人々は、いま現在議論するために集う場を持っていない。よって、本特集全体から統一的に読み取れるメッセージは現時点ではそれほど明確ではないかもしれない。本特集を通じて、同じ問題意識を持つ人々が集い、より多くの人々が研究に参加することで、次のステップへ進めていけることを願っている。

(2015年4月7日)